

ミュージアムが何らかの歴史像を伝えるためにモノを収集するとき、そこには常に歴史的価値や重要性をめぐる判断が下される。「これを収蔵すべきか否か」を判断する収集とは、選択と排除からなるきわめて政治的な行為であり、コレクションは単なるモノの集積ではなく、そのような「判断の集積」である。コレクションからさらに選択／排除を重ねて構成され、アイデンティティや記憶と密接に結びつく歴史展示（歴史表象）もまた政治性が現れる場であることは明白であろう。だが、「歴史ミュージアムが政治的である」というとき、その政治的行為の主体とはいったい何者なのだろうか？

歴史ミュージアムの政治的側面については、ピーター・ヴァーゴによる『ニュー・ミュージオロジー』の登場を嚆矢に、過去20年ほどの間に明らかにされてきた。これらの研究は「展示の受け手側の多様性（展示の解釈の多様性）」を詳細にする一方で、収蔵のプロセスにどのような組織や人々が関わり、そこにいかなる問題が生じるのかといったミュージアム側に内在する多様な力学や重層性は議論から取り残されてきた。

連邦政府が文化政策に直接関与することに消極的なアメリカにおいて、ミュージアムにきわめて重大な影響を及ぼしているのが、民間資本（プライベート・セクター）である。そのプレゼンスの大きさは、展覧会が大企業ロゴと共に宣伝される様子に見ることができる。問題は、ミュージアムに対する彼らの支援がある種の思想や利害と結びついて決定され、歴史表象にも重大な影響を及ぼしているにも関わらず、両者の緊密な関係がはらむ問題がミュージアムの政治性を問う射程からほぼ除外されてきたことにある。

本研究はこの問題に焦点を当て、ナショナル・ポートレート・ギャラリー（National Portrait Gallery、ワシントンDC、スミソニアン協会、以下NPG）を事例とし、コレクションや展覧会、教育プログラムなどを通じてNPGが表象するもの、すなわちナショナルな歴史が必ずしもNPGに専有されているのではなく、社会的力学の作用のもとに選択、決定されていることをプライベート・セクターの存在を軸としながら明らかにするものである

NPGとは、ナショナルな歴史に貢献した人物のポートレートから成る歴史ミュージアムであって、美術館ではない。その始まりは、1856年、ロンドンに開館したNPGロンドンに求められる。NPGとは19世紀のナショナル・アイデンティティの国際競争的状況から生まれたきわめて近代的ミュージアムであり、以後このプロトタイプがエジンバラ、ダブリンなどアングロサクソン圏のNPGに受け継がれていく。

本研究は、まずはこのプロトタイプとしてのNPGロンドン成立の思想的歴史的背景をたどることから始める。NPGロンドンはアメリカの人々にとって長らく憧れの対象であり、18世紀にもチャールズ・ウィルソン・ピールによる公人ポートレートからなる展示室が設立されていたが、19世紀のアメリカの人々にとって、いつかアメリカにロンドンのようなNPGを設立することは夢であった。そのための構想源のひとつとして、ポートレート入り伝記集の出版事業が行われている。これら18世紀、19世紀のアメリカにおけるいわばNPG構想を、それぞれの時代の政治思想（共和主義、ジャクソニアン・デモクラシー）、社会的経済的状況に照らし合わせながら検証する。現実にはワシントンDCにアメリカのNPGが開館するのは1968年のことであるが、そのための準備は冷戦下の1950年代から進められていた。具体的な設立手続の中で、冷戦下の反共産主義、愛国主義がNPGにも影を落としていく。そのプロセスを関係者の文書からたどり、NPGがアメリカのナショナル・ヒストリー表象の機関であると同時に、そのときどきのカウンターパート（あるいは他者）に応じて異なるナショナル・アイデンティティを表象してきたことを明らかにする。最後に、そのようなナショナル・ヒストリー／アイデンティティに大きな影響を与える現代の歴史アクターとしてのプライベート・セクターの問題を、ジョージ・ワシントン像《ランズダウン》のNPG収蔵に多大な支援を行った民間財団との関係からたどり、連邦政府資金を得ているNPGとプライベート・セクターは決して対立関係にあるのではなく、むしろ補完的関係に立ちながら、収蔵、歴史表象に協働して関わっていることを明らかにしたい。